

はじめに

岡部嘉幸

(千葉大学大学院人文科学研究院)

千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト「対照的手法に基づく日本語研究」(研究代表者：岡部嘉幸、2019-2020年度)のプロジェクト報告書をここにお届けする。

言語研究において、対照的手法をとることは非常に有効である。たとえば、対照することによって研究対象とする形式の特徴や性質をより明確に記述できる。また、対照することによってこれまでは気づかなかった研究対象の性質に気づいたり、逆に、その研究対象特有の性質だと思っていたものがかなり普遍性をもった現象であることに気づいたりすることができる。

ただ、一口に対照といってもその内実は様々である。今回のプロジェクト報告書では、この研究プロジェクトに参加してくれた4人の大学院生(博士後期課程3名、博士前期課程1名)の研究成果が掲載されているが、そこで扱われているのは、モンゴル語の主題標示形式、アイヌ語の斜格名詞を主名詞とする連体修飾節(関係節)、日本語の無意志的使役表現とその中国語訳文、現代日本語における類義の並列助詞「や」「やら」「とか」「だの」とバラエティに富んでいる。また、その中には、他言語と日本語の対照を行うものもあれば、同一言語内の類義的(あるいは類似構造的)な複数形式の対照を行うものもある。さらに、日本語の文法現象の解明に主眼がある研究もあれば、日本語文法の研究成果を補助線として他言語の文法現象を解明しようとすることを主な目的とする研究もある。その意味で本プロジェクト報告書は対照的研究のもつ射程の広さを示すものとなっている。

折からの covid-19 感染症の流行により、メンバー間での十分な討議の機会を設けることができず、それぞれの研究内容をプロジェクト全体としてブラッシュアップできなかった面は確かにある。その点で、本報告書の内容には、様々に至らない点、不十分な点があるのではないかと思う。しかし、本報告書に掲載した内容は、参加メンバーが様々な制約の中、でき得る限りの努力した成果であることもまた確かである。

読者諸賢のご海容を願うとともに、変わらぬご指導、ご支援を賜れば幸甚である。

(おかべ よしゆき・千葉大学大学院人文科学研究院・教授)